

# 図書館通信 —44—

\*\*\* 新入生のための特集 \*\*\*

1978.4

## 新入生諸君へ

館長 渡辺安夫

漢和辞典を引いて字を確かめる。

国語辞典で語句の意味を知り、或る事を知りたくて百科事典を開く。

辞書、事典も間違いなく書物である。それを利用することは必要だし、有意義でもある。が、ただこのことのために書物を手にしても、それを「読書」とは呼べないのではなからうか。況んや劇画・漫画においておや、である。

レポートを提出しなければならぬから書を読む。講義をより深く理解しようとして読む場合もある。ダブルとき知らぬと恥ずかしいから特定の書物を借り出すこともあるし、読みたくて読むたくてたまらない本だから、ということもある。

とにかく、本をどんどん読むべきである。「読書」とは言い得ぬとしても、辞書の類も大いに利用すべきである。わが静岡大学の附属図書館を遠慮なく活用して欲しいのである。

やや旧式な言い方だが、

書物はかけがえのない師友である。ときには闘いを挑まざるをえない相手ですらある。

或る人が選ぶ書物はその人間のひととなりを物語るし、やがてその人が果たすであろう社会的役割を示唆したりもする。職をもてばこのことはもっと顕著に現われるに違いない。

現代は科学、技術の時代であるという。その振興を国是とする国は多く、科学教育の充実、発展を政策の一つにしている国もまたまことに多い。それは洋の東西を問わず、体制の如何を問わずそうである。

経験的に得た確かなデータを抛りどころにし、推論をまじえつつ自然的事実を在るがままに知ろうとする営みを人間が始めてから未だ300年そこそこだというのに、科学・技術がもたらした成果はわたしたちを圧倒する。

それは人間の生活を変化させた。学問の対象、方法を大きく変えた。嘗て四書五経がそのまま学問であった時代があり、読み、書き、算盤が庶民の学問、技術とされた時代があった。が、いまや状況は著しく変わっている。

「知識」を意味するラテン語を語源にもつ science が特定の営みだけを指すようになり、獲得されたその知識が知識のなかの知識であり、知識の代表と看做されるようになった。

その方法は「対話による共同の思惟」や「独りでする瞑想」ではなくて、「物によってなす実験、実証」である。それが数学を不可欠とするために、数学の習得は当然のこととして要求される。

「記憶」よりも「判断」を重視したのは、数学者でもあったデカルトであり、「文字なき人間」であることをむしろ誇りとしたのはダ・ヴィンチだった。四書五経時代の英才は現代の英才たりえぬ、かも知れないのである。

その後、同じように合理性、実証性を標榜する社会科学が成立し、程度の違いはあるにせよ、このことが他の諸学にまで及んでいった。

科学的であることはよいことである。

この道を引き返すことも、もはや出来ないだろう。第一地球上の人間が全部ヒッピーになるわけにはゆかないし、例えば科学、技術がもたらす公害を除去できるのも、また同じ科学、技術でしかない。

しかし、科学馬鹿、技術馬鹿になってはいけないと思う。

より科学的になるためにも、その科学をよりよく生かすためにも、わたしたちは声をかぎりに読書の効を説くのである。

諸学の真の目標は人間の生活を豊かにすることである、と言ったのは、ペーコンであった。

# 四階鳥かん図

## ① 受付

- a. 入館・退館の手続
- b. 館外貸出証申込受付・発行
- c. 学外諸機関への紹介状発行
- d. その他インフォメーション

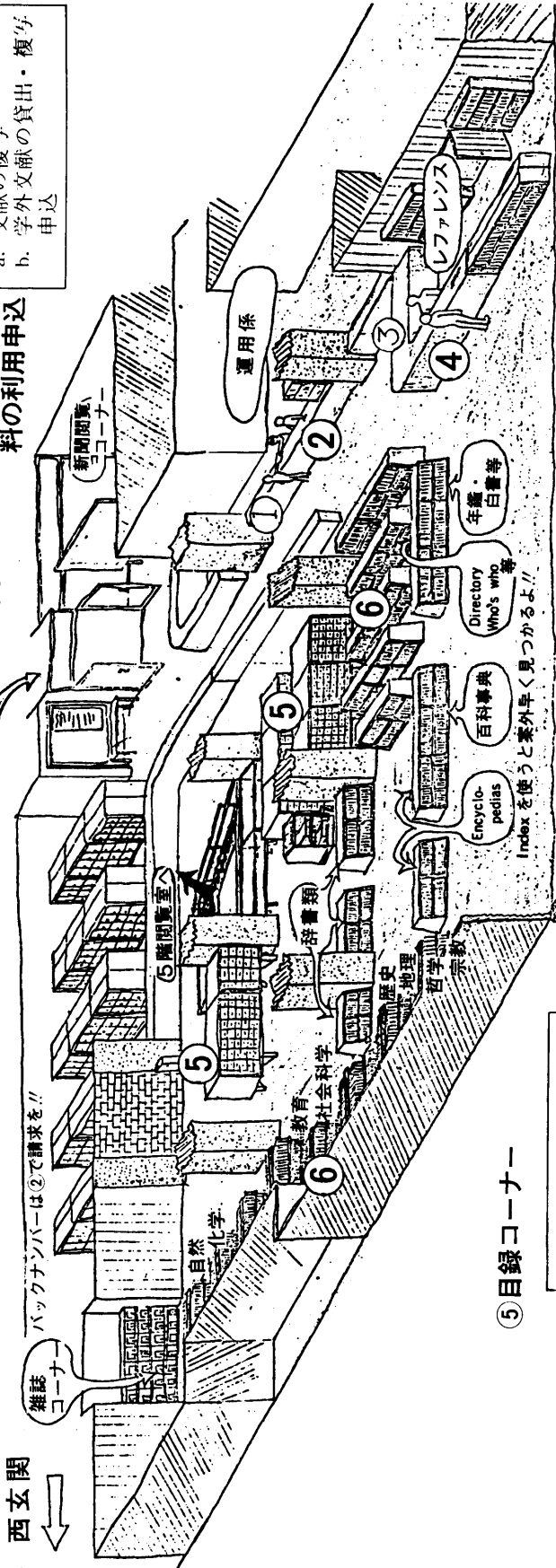
## ② 貸出・閲覧・返却

- a. 所蔵文献の貸出
- b. 書庫内文献の館内閲覧
- c. 貸出文献及び閲覧文献(書庫所蔵分)の返却

## ③ 複写・学外資料の利用申込

- a. 文献の複写
- b. 学外文献の貸出・複写申込

## 正面玄関



## ⑤ 目録コーナー

- a. 著者名目録・書名目録 (A B C 順排列)
- b. 分類目録
- c. 特定図書・所蔵有無・図書の排架位置等の確認

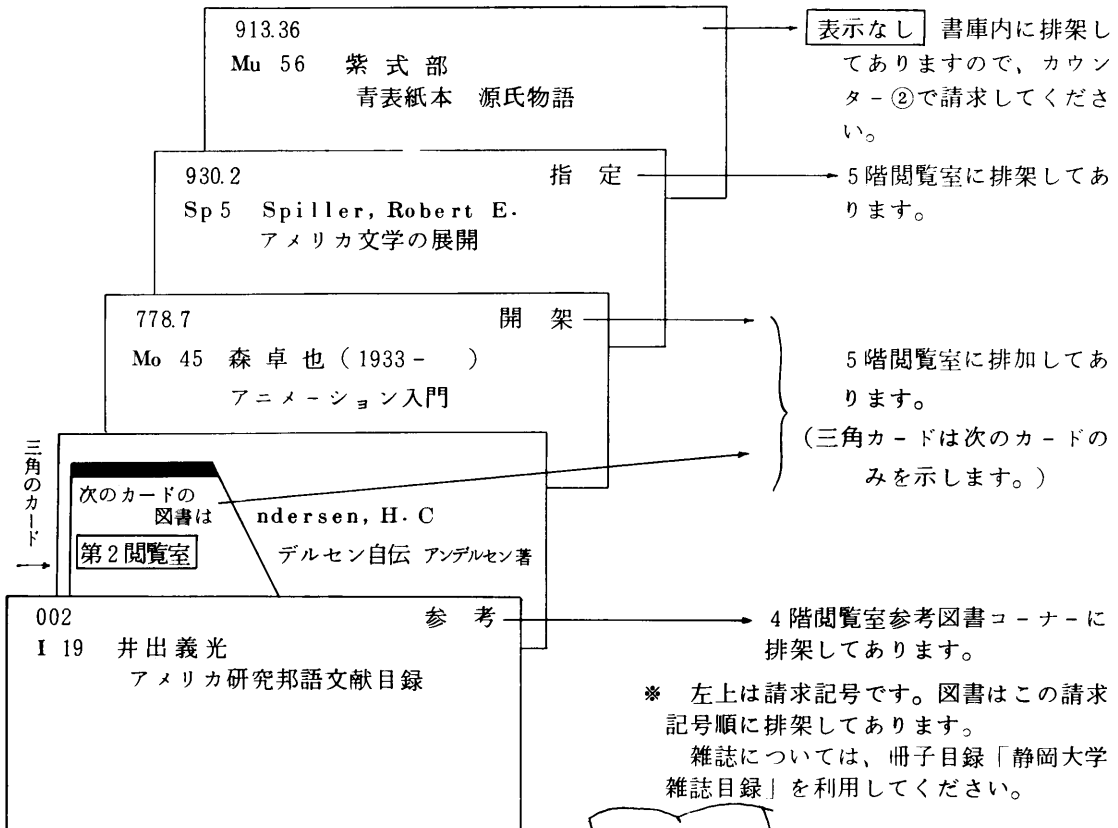
## ⑥ 参考図書コーナー

- a. 辞書・百科事典・年鑑・白書等の各種参考資料
- b. 館内閲覧のみ

## ④ レファレンス

- a. 図書館利用案内
- b. 目録利用案内
- c. 書誌事項の確認
- d. 文献の所在確認
- e. 他館の利用案内
- f. その他の調査

## 目録における図書排架位置の表示



### 蔵書の種類

**開架図書**…… 5階閲覧室には約26,700冊の図書があります。これらは一般的によく利用される学生の学習及び教養のために備付けられた図書です。

**指定図書**…… 5階閲覧室にはまた約16,500冊の指定図書があります。これらは授業の内容に関連のある資料として教官が指定したもので、学生は授業を受けることと並行して指定図書を読むことにより、授業内容の理解を一層深めることができるように備付けられた図書です。

**参考図書**…… 4階閲覧室参考図書コーナーにはよく使用される参考図書(辞典・事典・書誌・目録等)が約5,400冊備付けてあります。

**書庫内の図書**…… 古い図書および特に必要とみなされた図書は書庫にあります。これらは、全て目録にあり閲覧できます。

書庫内にある主な図書。

- 岩波文庫 ○岩波新書
- 河井家寄贈新聞コレクション
- 旧制静岡高等学校蔵書等

### サービス時間

窓口受付時間

窓口諸業務を行なっている時間帯は次のとおりです。( )内は土曜日。

#### 平常時

- ①受付 9:00~17:00 (9:00~12:00)
- ②貸出・閲覧・返却 9:00~17:00 (9:00~12:00)
- ③複写・学外資料利用申込 9:00~12:00, 13:00~17:00 (9:00~12:00)
- ④レファレンス 9:00~12:00, 13:00~17:00 (9:00~12:00)

#### 試験期

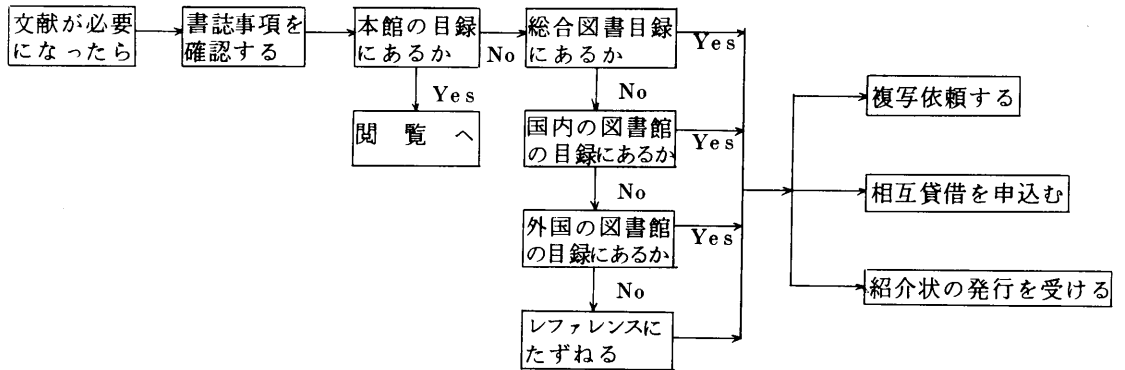
(9月、1月、2月)

- ①受付 9:00~19:30 (9:00~16:00)
- ②貸出・閲覧・返却 9:00~19:30 (9:00~16:00)
- ③複写・学外資料利用申込 平常時と同じ
- ④レファレンス 平常時と同じ

### 休館日

日曜日・祭日・本学創立記念日(6月1日)  
その他図書館業務上必要な時(「図書館通信」・掲示等でお知らせします。)

■文献入手の方法



■文献・資料入手の際の便利な目録類

静岡大学雑誌目録 和文篇・欧文篇 静岡大学所蔵の雑誌・紀要類・新聞の目録。誌名のアルファベット順。河井家寄贈新聞目録は、本館所蔵の明治上期から大正末期までの各種新聞の目録。

学術雑誌総合目録 (人文科学・自然科学別、それぞれに和文篇・欧文篇あり) 全国主要大学、諸研究機関所蔵の学術雑誌の目録。

国立国会図書館所蔵雑誌目録・欧文雑誌目録 雑誌記事索引 科学技術編及び人文・社会編

国立国会図書館に納本された和雑誌中の論文の索引。

国立国会図書館蔵書目録

Union Catalog of Foreign Books. (新収洋書総合目録) 国立国会図書館編集・発行

全日本出版物流目録 年刊 昭和23年版から。

National Union Catalog. アメリカ・カナダの700館の総合目録。

British Museum General Catalogue of Printed Books. 大英博物館の蔵書目録。

Catalogue Général des Livres Imprimés. フランス国立図書館 Bibliothèque Nationale の蔵書目録。

その他各種の図書目録、雑誌目録、蔵書目録等が図書館に備えつけてありますので、ぜひ御利用ください。

■学外文献・資料の利用申込について

学外の他の図書館・大学所蔵の文献・資料の貸出・複写を希望する場合には、窓口③へ申込み、必要な手続きをとってください。(国立国会図書館の場合、貸出は申込からおよそ2週間で、複写は申込からおよそ3週間以内で、現品がお手元に届きます。)学外文献の所在確認等については、④レファレンスへ気軽に相談すれば懇切丁寧に調査してくれます。

また窓口④では、学外諸機関への紹介状を発行いたします。他大学の図書館等を利用したい場合には、お申してください。

■学生購入希望図書について

予算、収書基準の許す範囲でできるだけ希望にそいたいと考えておりますので、せいぜいお申込み下さい。申込用紙と投書箱は4階のカウンター横と5階閲覧室に備えてあります。

図書館からの購否等の回答は約1週間後に4階カウンター横の掲示板にはり出します。購入決定後、発注、受入、整理し、閲覧、貸出できるまでに1カ月半から2カ月かかります。

なお、高額のものについては図書選定委員会にかけの必要があり、最終決定までかなり日数がかかりますのであらかじめ御了承下さい。

■閲覧規程の改正について

新年度(4月1日)から閲覧規程が改正され、学部学生に対する貸出の枠が4冊以内、1週間以内にゆるめられます。

なお指定図書、各季休暇前の長期貸出、演習・ゼミナール用、卒業論文用の貸出、等については本館と分館とで取扱いが多少異なりますので、詳細はそれぞれのカウンターでお聞き下さい。



を下記の通り行ないますので、御参集ください。

- 期 間 4月17日(月)～22日(土)
- 時 間 第1回 11:00～  
第2回 13:00～  
第3回 15:30～  
(但し、土曜日は第1回目のみ)
- 所要時間 毎回20～30分
- 内 容 図書館案内(書庫内見学も含む)  
利用案内 他。

## 私のすすめたい本・34

## —— 新入生に向けて ——

## 数学嫌いに特に勧める

小野 仁

青春の糧ともなる重厚な名著のたぐいは他の先生方におまかせずして私はごく軽い読物を一冊紹介しよう。それは※小針規宏著「数学の七つの迷信」(東京図書)である。先日ふとした機会にこの本を手にとり言いようのない懐しさに包まれた。

私が初めて彼の名に出会ったのは今から十年ほど前、ちょうど諸君と同じ大学一年の時だった。その年の五月に教養部学生を対象とした雑誌※「現代数学」が創刊された。自分と同じ時期にスタートを切ったという事もあるが特に親しみを感じた私は毎日欠かさず愛読していた。彼は倉田令二郎や森毅と共に常連の執筆者で毎号毎号水を得た魚のような生き生きとした文章を書いていた。

創刊から半年ほどたった頃であろうか。巻頭の「数学戯評」の欄に「S・F・ショートショート・南の島」という文を見つけ、数学誌にもこのようなものが載るのかと新鮮な驚きを感じたのを今も覚えている。それは羨望心や諸タブーの点で性と食とが我々の社会とは完全に入れ代わっている南の島に漂着した男の体験談という形をとったものだった。その文自体は無記名だったがそれから二ヶ月後、別の欄に記名入りでその続報が掲載され、彼の作だとわかった。今度は「すうがくえんしゅう—道徳教育の巻—」などと題して数学の問題はそっちのけで食事風景がどうの島の宗教はどののといった事を悠々と書いているのだから型やぶりもここまですれば超一流であろう。もちろん、これらはただ単に面白可笑しいだけの文ではなく、その中には彼特有の皮肉で痛烈な社会批判がこめられてはいるのだが……。

当時(1968年～71年)いくつかの雑誌に掲載された彼の文のうち十七編を集めて彼の死後出版されたのが最初に掲げた本である。そこには南の島の続報も収められている。

その中から数学的なものの考え方の例として書かれた「ウツツキ鬼の話」を取り上げてみよう。「極楽と地獄の別れ道に正直者とウツツキ(ウツしか言わない)の二匹の鬼が番をしている。どちらか一方に一回だけ質問をし、イエス・ノーの答だけ聞いて極楽へ行くにはどうするか。」という問に対し答は「(どちらか一方、たとえば右の道を指さして)『こちらが極楽への道かと尋ねたら、

彼(もう一匹の鬼)はイエスと答えるだろうか』と質問をし、返答がイエスなら左をノーなら右の道を行けばよい。」となる。質問をした鬼が正直者だった場合(この場合もう一匹はウツツキ)とウツツキだった場合(今度はもう一匹は正直者)とに分け、落着いて考えれば理由はどなたにも納得していただけたと思う。彼は、「理由は自分で考えてごらん。」と突放した後で「ある瞬間、脳神経の回路がパチッとショートするように『あ、わかった!』となるだろう。数学の理解とは、まさにこういうものなのだ。」と言っている。この文には「番をしている鬼が一匹だけでそれが正直者かウツツキかわからない時はどうするか。」というオマケもついている。答は本文を読んでほしい。

これらの文が活字になった時期と学園紛争の時期とがちょうど重なっており、当時彼のいた京大教養部もバリケードの中だった。十七編の中には当然その事に関するものも含まれている。十年近くたった今、話題としてはちょっと古い感じを受けるかも知れない。しかし、それを補って余りある彼の人間の魅力にあふれた、彼自身の生き様がそのまま表われたような文章が並んでいる。一見、数学者らしからぬ文と思われそうだが、これこそは自由奔放、なにものからの束縛をも嫌う数学者の頭の中をたち割ってそのままさらけ出したような好著である。数学に興味を持つ諸君はもちろんの事だが、数学と聞いただけでジンマンシンの出るようなアレルギー患者に特に一読されるようお勧めする。(教養部・数学)

## 化学と人生

北岡 隆吉

四月になると、教養部のキャンパスは一斉に活気をおびてきます。緑の芝生の上方には桜がほのかににじみ出して、再びあのエネルギーにみちた時がきたのだと心も浮き立ってきます。それはあたかも一つの舞台——曾って弥生人たちがその原初の笑いをもって談笑しながら往き来したでもあろう舞台に、そのまま載った情景のようでもあります。

さはあれ、この大学に入学した時点から、あなたたちは一つの季節を迎えたのですから、今こそあなたたちの胸のキャンパスに自由に意図にみちた未来図を画いてゆくことになるのです。

多くの人にとって、今日なお、書物との出会いは人との出会いと同じように心弾む、美しく美しいものに相違ありません。しかしそれは決して強制されるべき性質のものではありませんから、私

がここでおすすめする書物にしても単なる参考として受けとって頂いて支障はありません。

私個人の経験から始めれば、以前にある場所で Eugene Charabot らの

“Le parfum chez la plante.” Paris  
(1908)

を偶然見いだしたときは心躍る思いで、早速借用し写しとった事でした。

1925年ころから有機化学は漸く実験事実の羅列から体系化の道を進みはじめました。

R. Robinson, A. Lapworth らによって、有機化学の電子説が彼等の豊富な実験的研究の産物として提唱されました。その大要は

R. Robinson “Two lectures on an outline of an electrochemical (electronic) theory of the course of organic reactions.” Oxford (1932)

に見ることができます。同じ著者の天然物化学に対する深い洞察から生まれた述作

R. Robinson “The structural relations of natural products.” Oxford (1955)

も興味深い読物です。Lapworth - Robinson の体系はその後共同研究者の M. J. S. Dewar によって更に量子理論的に発展させられて

“The electronic theory of organic chemistry.” London (1946)

となって出されました。デュワーの近著\*「新しい化学入門」榊・安田・竹内訳(広川書店)はロンドン大学の一年次生を対象とした講義によった化学書です。

その他思いつくままに、そのいくつかを手にとって頂きたい書物をあげてみましょう。これらはいわば食後のフルーツのように身心に浸透してゆくような状態で読まれることが望まれます。

\*桜田一郎「高分子化学とともに」紀伊国屋新書

\*井本稔「ナイロンの発見」東京化学同人

水島三一郎「物質とは何か」講談社

大阪大学開放講座 5 「生命とは何か」

(赤堀・成田述) 大阪科学技術センター

\*小島頼男「エネルギー講話」東大出版会

\*朝永振一郎「量子力学的世界像」弘文堂

あとの二者はやや難解かと思われませんが、じっくりと腰をおちつけて、よみ進んで下さい。なお英文による読み書きに関しては小冊子

\*L. F. Fieser, M. Fieser “Style guide for chemists.” Maruzen Asian edition

があります。訳書もありますが原著者の声を生で聞く上では、こちらがよいと思います。

もしあなたにあるとすれば、まだ残っている従来の平面的な暗記主義から脱却して、奥行きのある立体的な真の展望がこれらの著作によって開かれる契機となれば、これ以上のことはありません。

(教養部・化学)

## 見合いと恋愛

「私のすすめたい本」まえがき

仁平道明

生きるための修羅場に出ることをしばし猶予されている学生時代には、よく、現実の自分の生活にはあまりかかわりのない問題について観念的な議論をする。次元の高低はともかくとして、そのような場合の話題の一つに、結婚は見合いと恋愛のどちらをえらぶかということがある。すでにあまたたび夢破れた年寄りとはちがって、夢多い年頃の諸兄諸姉は大抵は恋愛結婚をのぞむものであろう。たとえ、「見合いの方がいいのよ」などと、さとしたようなことをのたまわるお嬢さんがいたとしても、心の中で御当人は、「不美人は見合いでもして、ふさわしいつまらない男と結婚すりゃいいのよ。でも美人の私はすばらしい恋愛をして……」と思っているのだ。自分はハワイ温泉三泊御招待付のあたりくじをひけるとしているしあわせな年頃である。もっとも、恋愛結婚を夢みる心の底には、見合い、すなわち結婚という目的をもって人と結びつこうとすることを、いさぎよしとしない青年の潔癖さもあるのであろう。

たしかに、純粋な結びつき、感激のある出会いをのぞむのは悪いことではない。本との出会いにしても、本屋の棚でふと手にとった本が、一生を決めるような影響を与えたというのは感激的である。この本はすばらしい、是非お読みなさい、と言われて読むのは、おへその曲がり角にさしかかった年ごろである諸兄諸姉にとっては、少々面白くなかろう。本は自分で選んで読むものだから、頭の中味、心の状態がちがう以上、本との出会いも人によって全く異なったものになるであろうし、普通、すすめた人の味わったであろう以上の感激はない、と言いたくなるのも当然である。

だが、すすめる側の立場から言わせていただくならば、たとえば私以外のこの欄に書かれる諸先生にしても、そんなことは百も承知なのである。野暮を承知で書いているはずだ。自分の味わった感激の百分の一でもわかってもらいたい、少しは役に立つことがあるのではあるまいか、と思って書いているはずだ。その思いだけはわかっていただけまいか。別に、昨今のように本があふれていては選択に困るであろうとか、どの本がよいか教える、この本を読めば学力がつくぞ、と思っているのではない。

結婚とちがって、本については重婚もゆるされる。すきなだけ恋愛結婚をし、そして、我々月下氷人のすすめる相手とも見合いをしていただきたいものである。

さて、いよいよ私も、たとえば「伊勢物語」は

いかにすばらしいか、などということを書かなければならないのだが、さいわいなことに紙数が尽きた。今のところ、ある本との出会いにいかに心を動かされたかということを書く気恥ずかしさにもたえられず、かといって、さらりと「この本はいいよ」と言っている芸もない私は、このような駄文を草して、せめて、図書館報連載の「私のすすめたい本」欄をおすすめする次第である。

(教養部・国文学)

## 『資本論』のことなど

中尾 健二

去年から学生の要望で\*『資本論』の読書会をはじめた。ディーツ版の著作集で一回に2ページほど、牛歩のあゆみである。しかし、こうした強制的契機がなかったら、もともとナメケ者の小生『資本論』を冒頭からコツコツ読むなどという作業はやるはずもなく、学生とはありがたいものだ感謝している。「きちんと読まなければいけないなあ」と思いはじめて何年の歳月が流れさったことか。『資本論』がいいにも、必読と思いつつも、いまだはたせずにいる本があまたある。こんなわけだから、他人に本をすすめる資格などまったくなく、わが事でせいっぱいの現状だから、学生諸君には「ビック・コミック・オリジナルでもいい、読んでくれさえすれば、／＼」とでも言うておくことにしようか。あとは話のついでだから、『資本論』を読みはじめての感想など記してお茶をにごしたい。

まず、経済学として『資本論』を読むことには重大な陥穽がある、さらに言うならば、反動的な読み方にさえなるということである。現在の学部・学科編成はブルジョア的制度の一環であって、その制度に埋めこまれた経済学者たちによって『資本論』が読まれ、研究されていること自体、グロテスクな図と言わざるをえない。マルクスには、近代科学批判を動機の一つとして展開されたドイツ観念論の精神が批判的に継承されており、＜経済学批判＞の精神はこうした伝統を無視しては理解されないものである。古い科学の自己了解で、それを克える志向をもった著作を読んだところで、正しく理解されるはずはないのである。経済学以上のものとして『資本論』を読む、これが要請の第一点である。

つぎに冒頭部分にかかわるわけだが、そこでは疎外論的な手続きと、記号論的な手続きが共存しており、ここの読み方は慎重でなければならないことである。従来、俗説では、価値は抽象的人間労働に環元されるのだから、マルクスは労働価値説なりとあっさり片づけられてきたわけだが、それだけのことなら、等価形態だとか、相対的価値

形態だとか、しちめんどろな(記号論的)分析など必要なく、疎外論の手続きで一貫させれば、それでよろしいわけである。100円のカス・ライターと10円のマッチ10個がどうして等しい価値をもつのか?をあらゆる自明性を去って、つまり、価値とか価格を前提せずに、またイコールという数式記号をも前提せずに、その発生自体を問いつつ解明することは、なぜリンゴは落ちるのか?を問う以上に至難と言わざるをえない。抽象的人間労働は、その解明の途上で提出された一応の仮設にすぎない。なぜなら、資本制という歴史段階がはじめて労働を抽象化することを可能にしたわけで、それを価値が環元されるべき基体と考えるのは、循環にすぎないからである。その程度のこと(疎外論的把握)は、マルクスが批判したヘーゲル左派たちがすでに語っていたことである。『資本論』には経済学者たちの考える以上に、現在の社会をカッコに入れて宙づりにするラディカルな潜勢力をひめていのように思えてならない。だから、われわれをとりまく自明性の解体にむけて『資本論』を読む、これが要請の第二点である。

わが国でもこうした方向での試みがなされはじめている。広松渉の\*『資本論の哲学』、真木悠介の『現代社会の存立構造』、柄谷行人の『マルクスの系譜学』(\*『展望』ならびに\*『現代思想』連載)などである。週刊誌では物足りないけど、『資本論』ではしんどいという新入生がいたらすすめたい。

(教養部・ドイツ語)

ポアンカレ「科学の価値」等から  
まず……

川 辺 邦 彦

受験勉強から解放された皆さんはこれからの2年(十一年?)間を教養部で過ごすこととなります。この時期は未だたてこんだ専門の講義や演習等で追いまわされることもなく、かなり自由に学びかつ修養できる時といえます。そこで、ひたすら学問にのめりこむ(のめりこまされる)前に、科学とは何か、あるいは科学するとは何か、をこの時期に考えてみることから始めてみてはいかがでしょうか。沢山の本がありますが、たとえばポアンカレの\*『科学の価値』(岩波文庫)等からまずとりくんでみるとよいでしょう。自然科学の世紀とまでいわれた19世紀の科学に鋭い批判の目を具して独自の科学論を展開しており、一般向きに書かれた本でもあります。彼の科学論の四部作の第二集に当るわけですが。内容がやや数学的になりますが第三集の\*『科学と方法』(岩波文庫)にまで手をのばすとなおよいでしょう。

ところで科学は更に発達を続け、今や自分自身

の論理で歩み始めているとも言えます。科学と戦争の問題、原子力の問題、科学の発達と人間性の問題等々私たちは現代の科学をどのように理解したらよいのでしょうか。＊武谷三男「弁証法の諸問題」(勁草書房)とかがちりとりくんでみましょう。彼の科学思想、科学技術論が述べられており、骨は折れますがタイトル程近よりがたくはありません。著者の専門の量子力学に関する記述もしばしばでてきますが、苦手の人はこだわらなくてもよいでしょう。

大学に入って心に余裕ができてくると自然と自分の身のまわりの社会にもこれまで以上の関心が向いてきます。そこでまず社会の根底にあるべき人間の平等とはどのようなものかを考えるきっかけとして、＊ルソー「人間不平等起原論」(岩波文庫)を読みましょう。その本論は、自然状態における人間とその自然的不平等についての第一部と、所有権の発生と政治社会の形成過程における社会的不平等の起原と本質を論じている第二部とからなっています。そこには自然人としての人間本性はいかなるものであったか、また人間精神がいかに形成されてきたかをとおして、自然状態における殆ど無為であった自然的不平等によってかわって、社会的不平等が歴史的にどのように増幅され固定化されてきたかが述べられています。

本来の人間平等と不平等について考えたところで、そう、丁度応用問題に向かうような感じですが、たとえば＊藤永茂「アメリカ・インディアン悲史」(朝日選書)等読んでもらいたい本の1つです。小冊子ですが、量子化学を専門とする著者が渡米後どうしても書かないではおれなかった歴史的事実が、本来の人間の自由・平等が所有権の概念の導入と文明によってどのように破壊・自壊されていくかをそのまま示しており、人間の平等とは何か、今迄習ってきた私たちの言う民主主義の実体とはどんなものだったのか、強く考えさせられるのです。同様の意味で＊本多勝一「中国の旅」(朝日新聞社)も一読に値します。1971年の中国取材のルポですが、そこに語られている歴史的事実もとても過去のものとして清算させてしまえるものではないこと、つまり現在の自分の存在が、多分思ってもみなかった延長線上にあることをいやでも認識させられ、考えこまされることになるにちがいありません。それから、そう、私たちの存在の延長線上といえ、皆さんの先輩達にあたる旧制静高生の戦没者遺稿集である＊「地のさざめごと」(藤本治ら編、旧制静高戦没者

慰霊事業実行委員会刊行)も読むことをすすめます。この遺稿集には他の遺稿集と質的に異なる編者らの立脚点がみられます。たとえば、この遺稿集では戦没者を被害者としてとらえるだけでなく、加害者でもなかったか、と逃げていないのです。そしてそのことはひょっとしたら現在の私達も、その生き方次第では、結果的にはその加害者としての側面の延長上に今なおいることになるのではないかと考えさせられてしまうかもしれないのです。この遺稿集は現在市販されていないかもしれませんが図書館にはおいてあると思います。

与えられた紙数をもうこえてしまいました。良き本との出会いは良き人との出会いと同じく貴重なものです。たとえば上にあげたいいくつかの本等をきっかけに、糸をたぐってより良い本を求めるようにして下さい。(教養部・生物学)

(※は本館所蔵)

#### ■教官著作寄贈図書 <本館>

浅井 忠(教養部)

「時計年表」(昭和49)

若林淳之(教育学部)

「富士山麓史 — 富士急行株式会社創立50周年記念出版 —」 児玉幸多監修 若林淳之等執筆  
(富士急行株式会社 昭和52)

細井淳一(教育学部)

「一番町学区誌」 安本博編 細井淳一等執筆  
(一番町学区誌編集委員会 昭和51)

渡辺 功(教育学部)

「保健概論」 大塚正八郎編 渡辺功等著  
(講談社 昭和52)

「ソフトボール入門」 (成美堂出版 昭和52)

#### <静岡市内の図書館と博物館>

館 名	住 所	電 話
静岡県立中央図書館	谷田 620	62-1241
静岡市立図書館	追手町 4-30	52-9512
久能山東照宮博物館	根古屋 390	37-2437
静岡市立登呂博物館	登呂 5-10-5	85-0476
静岡市文化財資料館	宮ヶ崎 102	45-3500
日本平動物園	池田 1767-6	62-3251
駿府博物館	紺屋町 15-4	52-0111